

大杉栄論を論評する

揖斐川 宗平

明治大正期に於る極めて特異な精彩を放つ思想家大杉栄についてこれまで殆んど不当な位過少評価されてきた傾向がある。

革命家大杉栄についてはその多彩な奔放な反逆児として人物論的にも極めてユニークな存在であるが、思想家としての側面及び社会運動家としての側面ももっと研究されるべき価値をもった人物ではないかと思う。

本稿は最近の諸々の大杉栄に関する研究本や研究論文を中心にして大杉栄の思想家として側面を追究してみたい。

(註) 大杉の編輯者文芸家としての側面の研究は別稿に譲りたい。

一般に大杉に関する幾多の論文等を検討してみても言えることは、大杉栄の思想家としての多様な側面を固定的に枠づけすることなく、多角的に位置付けられ、把え返されてい

る点であろう。

それは別の面から見れば、大正播磨期に於る時代潮流の多様性に規定づけられる一面もあるが、主としては大杉個人の思想家運動家としての性格、姿勢、傾向の多様性に大きく帰因するのではないかとさえ思われる。

思想家大杉栄の位置づけを諸論文に照らして大別してみると、

- (1) アナルコサンディカリストとしての正統的な位置付けと評価
- (2) 個人主義的実存主義者としての大杉栄の積極的な評価
- (3) 特異な実存主義的永久革命論者としての大杉栄
- (4) 日本原始回帰論者の左翼的側面を代表するものとしての大杉栄
- (5) 当時においてボルシェヴィキ的側面をも

つ自由ソビエト主義者としての大杉栄
(6) バクーニンのなカテキズム的傾斜を示す大杉栄
等に分けられるのではないかと思う。
勿論厳密に言えば、以上の位置づけはどれも大杉の一側面を示すものであって全体的な規定づけを行うものではないことは言う迄もない。

第(1)の大杉像は殆んど文献資料が言及しており、最も一般的な大杉像であるといつてよい。

今日大杉に関する実証的な唯一の研究書となっている大沢正道「大杉栄研究」を始め、秋山清「ロシア革命と大杉栄」(「思想」一九六四年一月号)、多田道太郎解説「世界の名著「大杉栄」」(中央公論社)、秋山清・大沢正道「幸徳・大杉・石川」(北日本出版社) 秋山清「日本の反逆思想」(現代思潮社)等の論文も凡よそアナルコサンディカリスト大杉栄を一般的共通項として述べているが、勿論それが一般的な見方ではあるにせよ、大杉の初期(大逆事件まで)、中期(ロシア革命まで)後期(ロシア革命以降から虐殺まで)に至る思想的葛藤と軌跡は極めて幾多の起伏を示しているのであり、又その思想家と

しての未熟性と多様性、思想家大杉と運動家大杉との結合と乖離についてもっと有機的にメスを入れ、大正（明治）社会主義思想や運動の中に立体的に位置づけなければ不十分ではないかと思われる。

此の点今後の大杉研究は単に従来の大杉像を一般的に繰り返すのみに終わらず、多角的に突き進む必要がある。

階級戦論者で戦時セネスト論者であった初期、思想的には生の哲学を基礎とする特異な疎外哲学（自我哲学）、人間社会学を標榜し、実践的にはアナルコサンディカリストとしてあつた中期、更にロシア革命からアナ・ボル論争期に於てはボルシエヴィキ的協同戦線論から反ボルシエヴィキ的ソビエト論者へ傾斜した後期、そして一九二二―二三年に至る日本脱出——フランスを流放されて以降のバクーニンの非合法的なカテキズムにすら傾く晩期の大杉の思想的、運動的起伏は極めてユニークな起伏をなしており、その間大杉とてかなりの葛藤と動揺があつたものと思われるが掘り下げられて研究する必要がある、この点の追求は大正期の時代潮流の別の側面を浮き彫りにするものと思われる。

一般に大正期の思想運動、社会運動と言う

と大正デモクラシー論争が余りにも華々しかった為に何かそれで代表されるかの如き錯覚すらおこしかねないが、最近米騒動、関東大震災時に於る大量虐殺、在日朝鮮人、水平社の運動が実証性をもって研究され、発表されているが、未だ当時の社会運動や労働運動、農民運動の研究は少ない。

大杉栄の多角的な研究もこの大正期の三つの大きな潮流たる大正デモクラシー、大正社会労働運動、それに此の頃無気味に進行する大正テロリズム（左右を含め）との関連性に焦点を定めて言及したものは殆んどみかけない。今後の一つの課題であろう。

（註）今日一つの盲点とすらなつている大正テロリズムの徹底的な研究は昭和フアツシズムの分析に一つの視点を提供するものであると考えられる。

第②の個人主義的実存主義者の大杉については一般に昭和期に入るとその時代的性格に大きく左右されてか否定され、捨象されていった大杉の自我論に基づく実存主義的な傾向をもつ自我哲学（今日的に言えば、未熟ではあるが一つの疎外哲学、主体性哲学）を積極的に評価せんとするものである。

例えば高見順はその論文「大杉栄」（『日本思想家』朝日ジャーナル）の中で、「労働運動を、社会主義運動を、革命運動を大杉は『生の拡充』『生の創造』と見たのだ。それらの論文には『疎外』という言葉こそ出てこないが、明らかに『疎外』の存在を指摘して、それに対する人間性回復を主張した」と指摘している。

誰だったか忘れたが、大杉の哲学を「人間奪還の哲学」であると書いてあつたのを見たことがあつたが、この指摘は確かに傾聴に値するであろう。

大杉自身はこの自我哲学について言えば、観念と現実、個人と社会との間を絶えず揺れ動きながら葛藤していた様に思われるが、しかしこの様な側面をもつた社会哲学が既に大正期に於て叫ばれている（例え萌芽的にせよ）ことは単に自由奔放な大杉個人に還元することなく、日本社会思想史の一つの里程碑として位置づける必要があるのではないだろうか。

何か主体性哲学と言うと、戦後三大論争の一つたる主体性論争に規定されてかまるで戦後の産物かの観を呈するのであるがその点は改めて検討されるべきであろう。

大杉個人の研究に於てこの点に関して言えばやはりこの自我哲学の形成されていった哲

学的な背景や軌跡及び彼のおかれた社会的運動状況、更にこの立場のその後の大杉に与えた思想的、実践的影響を綿密に追ってみる必要がある。

私は大杉の自我哲学形成には彼の系譜的側面から言えば、例の赤旗事件で逮捕されて千葉刑務所での監獄勉強が大きかったのではないかと思うのであるが、その点はやはりそれなりの実証性が必要となる。

ところで、大杉のこのような側面はその後、「いわゆるボル派が主導権を握ってからの労働運動は、やがて、私の実感からすると、自我の確立とは反対の自己否定、そして生の拡充をむしろ否定する主体性の喪失、そうした自己犠牲的なもので運動が進められて行った観がある。大杉の革命運動観には今日においても学ぶべきものがあると思われる」(高見順、前掲論文)と言われるが、これは何も所謂ボル派に限らず、アナ派を含めて日本社会主義運動に一般的傾向であったが、しかしこの点は当時の時代的背景や社会的な運動状況とも密接に絡んでいて一概に高見順の如くには言えない。

それに大杉の実存主義的な自我哲学は所謂マルクス主義哲学や実存主義哲学からの経路

を辿ってきたものではなく、ステイルナーニ―チエーベルクソン等の哲学を彼が半かば独自に摂取して構築した哲学であるが故に、なお一層その独自性と限界性を色濃く内包していたと言えるのではなからうか。

第(3)の実存主義的側面をもつ永久革命論者としての大杉であるが、これは主として大杉の哲学や理論を革命家、叛逆家としての側面から見た場合の見解である。

私自身も大杉のこの側面をもつと評価すべきではないかと痛感する訳ではあるが、あいにくとこの点に関しての大杉の研究は極めて少ない。

大杉が後期から晩年によく口にした、革命と言うものは社会革命と個人革命が同時的進行し、実現されていかねばならないと言う考え方は把え方によれば極めて示唆的である。

大杉の「社会革命と個人革命の同時実現」論の基本的な論理構造は「同時―永久―全体―革命の統一性をつかまんとする努力の結果でもあり、それは「存在と意識」の、「社会と個人」の「同時―永久―全体」革命の統一像を模索せんとした未完成の産物であると言える。

此の点は同じ当時のアナキストで、永久革

命を叫んだ石川三四郎よりも発想法的にはすぐれており、ダイナミックであると言え

るともかくマルクス主義永久革命で軽視され、欠落していた点を彼なりに衝いているとも言えるのではないかとさえ思われる。

大杉は自分ではしばしば合理主義的とも思える論理弁証法的発想を拒絶するような言辭を繰り返しているが、しかし彼自身は皮肉にもその発想法に於て極めて弁証法的発想をしている。

西洋の或る哲学者は人間と言うものはそもそも弁証法的存在であると喝破したが、基本的にはそう言えるのではないだろうか。

ところで、大杉の此のユニークな「同時―永久―全体」革命たる「社会革命と個人革命の同時実現」論の論理的、哲学的根拠は如何と言え、大杉自身がこの点について体系的に述べた著書や論文はない。

それ故に彼の初期―中期―後期、更に晩年の思想的、実践的な軌跡を追って内在的追究をしてみるより他にないであろう。

ステイルナーニ―チエーベルクソンの流れを汲む個人主義的実存主義哲学やニ―チエーバクニ―ン流の永久哲学、ブルードンクロー

ポトキン流のアナキズム、更にその独特の進
化哲学や生物学的な宇宙観が極めて複雑に錯
綜して大杉と言う一個の特異な叛逆児の中で
体現されたものと言える。

更に当時あつては良し悪しは別にして堺
利彦、高島素之と共にかなりマルクス主義に
も通曉していた一人であり、そして見落して
はならないのは当時の大正播籃期の運動状況
による影響であらう。

大杉と言う人は日本の革命家に共通する求
道者タイプの革命家と違つて、或る面では極
めて西欧的な「口八丁手八丁」な、自由奔放
な西欧型叛逆児とも言うべきタイプの人であ
る。この点は同時代の北一輝と対象的であ
る。よく口では合理主義を指弾して非合理主
義を首唱する訳であるが、人物的には意外に
合理的な人にも思えてくる。

合理と非合理がうまく同居したような人ではあるまいか。

さて、この点についてはもつと言及したい
が紙数の関係上次に進みたい。

第(4)の日本原始回帰論の一人に大杉を加え
る説は、松沢哲成がその著書「橋孝三郎」
(三一書房)で述べている。

ひとまず彼の説を追ってみると、

「△原始回帰V的な体制批判思想は、先ず
幸徳秋水・大杉栄らのアナキズムから始まっ
た」そして大杉の言う「生の拡充」「生の歓
喜」「生の創造」を真に実現するためには
「相互扶助の協同社会」が営まれている「原
始の自由時代」への回帰をめざす「最後の
絶大なる緑り返し」をめざして蜂起せよ」と
大杉が主張したと言ひ、「大杉栄において歴
史とは出発点としての△原始Vにはさまれ
た、たえざる墮落・上向の二重過程であつ
た。ここでは、出発点と到着点とが螺旋的に
結ばれていた」更にその方法的特徴は「自立
主義」と「模範主義」であつたと論じている
訳である。

そしてこの△原始回帰V論的発想法は日本
ファッシズムの源流たる大正農民主義の橋孝
三郎や権藤成卿等にも共通して流れていたも
のであると彼は主張する。

この見解は確かにユニークな視点ではある
が、橋孝三郎、権藤成卿はともかく大杉を彼
の言う△原始回帰V派の一人に加えることに
は厳密に言へば重大な問題を含んでおり、又
松沢がそう主張するには大杉に関して余りに
もその論証性が部分的で実証性を裏付ける引
用文献がはなはだ少なすぎるし、恣意的だ。

ともなく一応検討してみると、彼が大杉を
挙げてゐる相互扶助進化論(クロポトキン)
に基づく無政府共産社会への希求であるが、
しかしここで重要な問題が惹起する。

即ち、大杉が果してその相互扶助進化論を
彼の言う原始自由社会への回帰の理論的根拠
として措定していたかと言う点が第一であ
り、次に大杉が原始共産社会△原始自由社会
を人類の「生の闘争」の到着点として予定調
和的に理想化していたかと言う点である。

大杉に限らず一般に社会主義者は客観的に
は別にして本人自身は定型的な予定調和的な
社会の理想化を図る様な発想法はとらない。
原始共産社会と大杉の言う無政府共産社会
とがかなり短絡的に二重写的に模写された
傾向がみうけられる。

ただ、確かに大杉の哲学や思想には日本農
本主義と共通する要因をもつてゐることは事
実であるが、その点をもつと考へてみると、
これは多分に大正期と言う時代精神的土壌に
基因する点もあるのである。

この面も含めて大正期の厳密な立体的な時
代底流の分析は極めて重要であらう。

また、松沢が言う様に大杉がその歴史観と

して出発点と到着点とが回帰する歴史回帰とも言うべき立場をとっていたとするのは余りにもうがちすぎではなからうか。

前にも述べた様に大杉はその歴史観として基本的には「生物進化—社会進化」説をとっていたと考えるのが妥当であろう。

ところで第(5)の大杉のボルシェヴィキ的と言うか、レーニンの側面すら示す大杉像を積極的に評価する説として飛鳥井雅道「ロシア革命と大杉栄」〔現代の理論—一九六七年一〇月号〕「大正期のアナキズム—大杉栄を中心として——」〔日本近代化の研究

(下)〕高橋幸八郎編〕等がある。

氏は先ず初期から中期にかけての階級戦争論者で第一次大戦に於る戦時ゼネストの首唱者であったことが、当時の日本に於て最もレーニンの思想に結果的には接近していた革命家であったことを指摘する。

「大杉は、『正気の狂人』とのことばを発明し、しばしばみずからをそれになぞらえていた。戦争(第一次大戦—揖斐川註)開始の時点で、公然と内乱を説くこと、これはまさしく正気の狂人であり、いかに孤立しているかに見えようと、次の時期、ロシア革命が開始されたときには、これまたレーニンを全

面的に支持する思想的準備が確立されていたと私は思う。」〔日本近代化の研究(下)〕飛鳥井氏によれば例のアナボル論争の実態は実はアナと社民との論争であったとのことだが、総じてこの時期の左翼潮流はアナル

コサンディカリズムと友愛会系の協調主義的社民が二大勢力であったが故に左派的側面を代表していた大杉らの主張がレーニンの思想と交錯すると言うことは十分ありうるのである。

更に氏は大杉が例の上海での「極東社会主義者会議」に出席したのち、ボル派の近藤栄蔵らと組んだアナボル協同戦線戦術を打ち出し、「この年(一九二一年—揖斐川註)『ク

ロボトキン研究』の総序に於て、『無政府主義などを廃棄している』と書き切っているのである。そして、堺・山川らが殆んど明確な態度を打ち出さなかったのに対して、彼は上

海へ、更にチブスにならなければ、モスクワまでゆこうとしていたのだった。」(前掲書)

と述べ、大杉が右派社民との対抗の中で極めてボルシェヴィキ的方針と傾向を示す軌跡をもっていたことを指摘するのである。

そして大杉が反ボルシェヴィキ的傾向を示していた点については、『ソビエト』と『党』

と『権力』の混同をはげしく衝いた『進行中の革命を何故擁護しないのか』は、昭和初期から現在までの見通しとしても、最も正確だったのである。」(前掲書)を結論づけ、大杉がボルシェヴィキ党内闘争たる労働者反対

派に注目した点からも、自由ソビエト主義者でなかったかをおわすわけである。さてこの論文の大杉像は旧来あまり指摘されなかった大杉の思想的側面を掘り出しているのだが、一つのユニークで斬新な視点であるにせよ、反戦論文を盛んに書いたり、翻訳したりしていた初期や中期とサンディカリズムに傾斜する中期との脈絡やロシア革命時からアナ

ボル論争の頃までの多彩な起伏層にその中で所謂ボルシェヴィキ的戦略や思想との交錯や接近についての説明にもう一つ論証性と実証性が弱い様な感じがする。

ただ、氏が述べる様に当時のアナ・ボル戦争の本当の実相を厳密に実証性をもって研究し直すことは今日的にも必要であろう。

最後に晩年の——特にフランス追放後クロボトキンを卒業してバクーニンに著しく傾斜し、非合法的カテキズムをすら構想していたのではないかと思われる点についてである。大杉の晩年の書簡集(未刊行)に所謂非合

法的な「Aの同盟」に言及しているところが、これが一体如何なる性格と実体をもくろんだものか定かではない。

ただ、大杉が後期バクーニン研究に精を出し、その中で例のバクーニンが校閲し、ネチヤーエフが草案したといわれる「革命に関する教理問答」所謂カテキズムをどのように考えていたかは興味のあるところである。ただ、彼は当時にあつてはいち早く、日本帝国主义が今後中国アジアへの侵略を開始し、日本国民を重大な試練の危機に引きずり込むことを予感的に提示していることから、(日)本の運命(参照)大正期の如き爆発的な労働運動や大衆運動がそのまま進んでいくことは考えていなかった。

この様な彼の当時に於る情勢把握からも、彼が非常に屈折した経路を内包しながら、所謂カテキズムの側面を全く考えていなかったとは言いが、しかし推量の域は出ない。ただ、私も又、「大杉自身は『米騒動』のときにもみられるように、やはり筆の人であり、本質的には行動の人ではなかった」(飛鳥井雅道、前掲書)という評価を完全に拭い去れない。

大杉と言う人は原則的な行動主義者と言う

よりは、情熱的な意気を感じる人ではなかったかと思う。

ところで大杉栄の研究は思想的、実践的、人物的に止まらず、大杉栄研究を媒介にして大正播種期に於る一つの底流を形成する立体的な社会構造を分析する重要な視点を提供するものである。

一般に大杉栄については通史的に言及されても近代日本思想家の一人として本格的に研究されてはいないのが現状である。

今後大杉栄の多角的な視点からの研究が一つの枠に縛られずなされていくことを期待するものである。

最後にこれまでの大杉栄に関する主要な文献を列挙しておきたい。(但し、通史的なものは除く。)

- (1) 大沢正道「大杉栄研究」(法政大出版局)
- (2) 多田道太郎「世界の名著——大杉栄——解説」(中央公論社)
- (3) 高見順「日本の思想家(2)——大杉栄——」(朝日新聞社)

- (4) 秋山清共著「幸徳・大杉・石川」(北大沢正道「日本出版社」)
- (5) 秋山清「日本の反逆思想」(現代思潮社)

- (6) 秋山清「ロシア革命と大杉栄」(思潮)

想」一九六四年一月号)

- (7) 池上徳三「講座日本の革命思想(5)大杉栄」(芳賀書店)

- (8) 青地晨「反骨の系譜——大杉栄——」(評言社)

- (9) 松田道雄「現代日本思想体系——アナキズム——解説」(筑摩書房)

- (10) 飛鳥井雅道「日本近代化の研究(下)——大正期のアナキズム(大杉栄を中心として)」(高橋幸八郎編)

- (11) 飛鳥井雅道「ロシア革命と大杉栄」(現代の理論)一九六七年一月号)

- (12) 諸伏 恒「大杉栄の革命理論に関する私論(上)」(黒の手帖)二三号)

- (13) 雑誌「ロマン・ロラン研究——大杉栄とロマン・ロラン」(一九七二年一月九号)

- (14) 近藤憲二「フランスから帰ってからの大杉」(自由思想研究)第一号一九六〇年七月)

- (15) 小松隆二「日本に於るアナキズム運動の終焉」(現代と思想)第三号)